

海軍航空隊出水基地と その戦後の歩み ～特攻と開拓の歴史～

城内雪郎

隊員遺影と出水基地空撮(昭和23年撮影)

開催にあたって

昭和15年、現在の出水市鹿島地区に海軍航空隊出水基地が開設されました。出水基地は、当初搭乗員の初歩訓練を行うことが主たる任務でありましたが、太平洋戦争が勃発すると実戦部隊が配備され、台湾やフィリピン方面への攻撃の拠点となり、多くの戦死者を出しています。さらに昭和20年になると、陸上爆撃機「銀河」部隊による特攻作戦や「中攻部隊」等による沖縄方面への攻撃作戦が展開され、多くの戦死者が出ました。

今回の特別展では、終戦70年を記念して、出水基地の沿革及び作戦の概況を整理するとともに、戦死隊員の遺影を展示することにより出水基地の実情に迫ってみようとするものです。

一方終戦以降、出水基地の一部は民間に払い下げられ、戦争疎開者たちを中心に新たな農地として開拓が進められました。今回の特別展では、入植者たちが困難な状況の中、現在の発展の基礎を築いた歩みについて、現在に残る戦績以降とともに「開拓団資料」等によって紹介します。

このたびの特別展を通して、海軍航空隊出水基地が果たした役割、そして戦後の歩みを見つめ直すことにより、未来に向けてもう一度戦争や平和について考える機会となれば幸いです。

- 会期:平成27年7月19日(日)～10月31日(日)
〔休館日:7月20日、8月9日10月第3日曜日〕
- 会場:出水歴史民俗資料館(中央図書館2階)
- 入館時間:9:00～18:00(平日)
9:00～17:00(土日祝)

- 主な展示資料: 出水基地設置請願書(複製)
予科練生の休暇(写真)
神風特別攻撃隊出撃者名簿
特攻隊員から家族への手紙
特攻隊員遺影
開拓関係書類と当時の写真

太平洋戦争と 海軍航空隊出水基地

我が国は、明治維新以降大陸との間に、安全保障上の困難な緊張関係を持ち続けることとなり、日清・日露戦争を経て、「満州」問題等で欧米と対立することとなった。



昭和12年、出水・米ノ津・高尾野の3町長は、政府に対して飛行場建設の請願を行った。

国防上の必要性に基づくが、一方では地域振興策という側面もある。

昭和18年、出水海軍航空隊が開隊した。開隊式では南雲長官が祝辞を読み上げた。正確な記録は残っていないが、一説によると約2,000人の関係者が勤務しており、休日のたびに町は賑わったという。

当初は、予科練卒業生等の初歩飛行訓練が主な業務であった。



沖縄へ薄暮攻撃を 行った「中攻」部隊



米軍の沖縄侵攻を受けた日本軍は、「九六式陸上攻撃機(中攻)」部隊等を豊橋、松島基地から出水に進出させた。

「中攻」部隊作戦の全貌

- 出撃回数(日数) 15回
- 出撃機数/準備機数 51機/70機
- 途中引返機数/出撃機数 17機/51機
- 不時着機数 /出撃機数 10機/51機
- 未帰還機数 /出撃機数 15機/51機
- 帰還機数 /出撃機数 9機/51機

機体の性能が低かったこと、味方戦闘機の護衛がなかったことなど被害が続出した。通常攻撃とはいえ、実質的には特攻に近い作戦であった。「陸攻」部隊全体で99人の戦死者が出た。

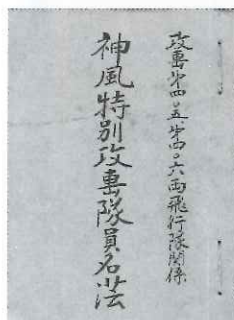


伊藤彰少尉遺品のマフラー。同少尉機は、攻撃後久米島に不時着。伊藤少尉ほか1名が戦死した。資料は、戦後米兵から返還された。

特攻作戦で壊滅した 「銀河」部隊



昭和19年10月に配備された「銀河」部隊は、出水で錬成を行った後、台湾、フィリピンに進出した。



フィリピンで壊滅状態となった「銀河」部隊は、出水で特攻隊として再編成され出撃した。

戦争末期の混乱した状態で正確な記録は不明だが、出水基地出撃戦死隊員50人、出水以外の基地からの出撃者戦死者26人の名前が記録されている。

田中仙太郎隊員の手紙

田中隊員が、福井の母親に出した私信である。便せんの裏に、自分が搭乗する「銀河」を描き、真ん中にあるのが「僕」と記している。



現在に残る 戦跡遺構

特攻顕彰碑「雲の墓標」が立つ「地下通信司令室」をはじめ、出水基地周辺には、掩体壕や防空壕などの構造物20数基が残存し、往時を偲ばせる。



基地跡を拓いた戦後 ～鹿島開拓団～

昭和21年、沖縄からの疎開者、海軍航空廠勤務者など4組合が結集して「出水開拓団」が設立された。

土地は痩せ、経験の乏しい開拓民の生活は厳しかった。

